



オールラウンダー

魔境育ちの全能冒険者は 異世界で好き勝手生きる!! 4

追い出したクセに戻ってこいだと?
そんなの知るか!!

α L P H α L I G H T

アノマロカリス

anomalocaris

アルファライト文庫





第一章

「だいじけん!？」

007

第二章

「きゅ～せ～ちょ～!？」

153

番外編

251

Makyo Sodachi no All-rounder
Ha Isekai de Suki Katte Ikiru!!



シンシア

レイピアが得意な
魔法学園の生徒。
子供のリュカと
添い寝がしたい!?

クララ

きづか
気遣い上手な魔法
学園の生徒。
子供のリュカを
ギューツとしたい!?

リュカ

本作の主人公。
全属性の魔法や
たかく
卓越した剣術など
あらゆる能力を
使いこなすが、
現在は子供の
姿に……?

ガイアン

肉体に絶対の
自信を持つ冒険者。
情報収集にも
長けている。

シオン

ちょっぴり天然な
リュカのパーティメンバー。
おはに
十八番は支援魔法!

キッド

魔剣とレアスキルで
戦う、獣人の少年。
その出自には
とある秘密が……。

シドラ

ダンジョン内で
発見された
タイニードラゴン。
体に似合わず
かなりの大食漢!

リッカ

リュカの双子の妹。
聖女候補の修業を
している。
お金が大好きで
ずる賢いところも。



主な登場人物

Main Characters



第一章
「だいじけん!？」

Makyo Sodachi no
All-rounder Ha
Isekai de Suki Katte Ikiru!!

第一話 久々の再会（まさかこんな場所です）

僕、リユカは、今日もクラウディア王国にある屋敷の庭で一人、剣の素振りに励んでいた。

無心のまま、剣を真すぐに振るい続ける。

そんな作業を一時間ほど続けた後で、少し休憩することにした。

地面に座り込んで剣を手放すと、改めて自分の体に視線を向ける。

……何度見ても、やはりこの姿を見ると悲しい気持ちになるな。

というのも、今の僕の体は、八、九歳くらいのころに戻っているのだ。

僕は溜息を吐きながら、どうしてこのようなことになったのかを思い返す。

冒険者として活動している僕は、仲間と共に、聖女候補である妹、リッカの護衛をしつつ旅をしていた。

その目的は七大陸に一つずつある穢れを浄化すること。

ここ、クラウディア王国に立ち寄ったのも、穢れを浄化するためである。

僕らは巨大な穢れの反応を辿り、クラウディア王国にある森に入った。

そこで出会ったのが、穢れの主である骸骨の魔物、カトゥサだったのだ。

カトゥサは闇を操る強大な力を持っており、「時間逆行」という、受けた者を若返らせる技を僕に掛けてきた。

その技を食らった僕は、この姿になってしまったという訳だ。

仲間の力を借りてカトゥサの無力化と、穢れの浄化には成功したのだが、僕の体はそれから一週間近く経った今でも元に戻っていない。

しかも、なぜか魔力まで使えなくなっていた。

連れて帰ってきたカトゥサいわく、「時間逆行」の効果は一日という話だったんだがなあ……。

ちなみに仲間の皆には、一足先に旅を再開してもらっている。

いつまでも僕の都合だけで皆を待たせるのは申し訳ないからね。

そんな訳で僕は一人、体を元に戻す手がかりを探しつつ、少しでも力を取り戻そうと空いた時間に修業に励んでいるのだ。

小さく息を吐いて、地面に置いた剣を手にとると、立ち上がる。

そして再び素振りを始めた。

こうして修業に取り組み日々がさらに数日ほど続いた。

その間にも体は元に戻らなかったが、修業のおかげか、嬉しいことが三つあった。

一つ目は、僅かだけど魔力を使えるようになったことだ。

まあ、今使える魔力量だと中級魔法くらいしか使えないけどね。

転移魔法や上級魔法、それに魔法同士を掛け合わせてより強力にする、複合統一魔法なんかはまだ使用出来ない。

それでも、少しでも力が元に戻ただけで、希望が湧いてくるというものである。

二つ目は、魔力を使えるようになったことで、手の甲に紋章が復活したことだ。

これで、普段は紋章にしまっている僕の仲間、タイニードラゴンのシドラを召喚出来るようになったんだよね。

ちなみに、久しぶりに召喚したシドラが最初に発した言葉は、「あるじ〜お腹減ったヨ〜」だった。

涙を流して僕の胸に飛び込んでくるかもと少し期待していたんだけど……まあ、いつもと変わらないシドラを見て、思わず安心しちゃったからよしとしよう。

三つ目は僕の持つ魔剣、アトランティカの声が聞こえたことだ。

魔剣や聖剣と呼ばれる武器は意思を持っており、長く鍛錬をして心を通わせると、会話が出来るようになる。

そしてこの状態になると、他の聖剣や魔剣の声も聞こえるようになるんだ。

以前はアトランティカと会話することが出来ただけど、この体になってから出来なくなっていた。

しかし、魔力が使えるようになったのと同時に、アトランティカの声が再び聞こえるようになったのだ。

これで体を元に戻す手がかりが見つかるかも知れない。

アトランティカは物知りだからね。

そう思いながら、僕は日課となった素振りを終え、家のリビングへと向かったのだった。

リビングに辿り着いた僕はソファに座り、腰に差したアトランティカを抜く。

そして、目の前の机に置いた。

アトランティカと改めて話をするためだ。

僕はこれまで僕の身に何が起こったのか説明する。

「——という訳で、なぜか体が元に戻らないんだよ。原因とか、アトランティカに心当た

りはない？」

僕が説明を終えた後にそう言うと、アトランティカは悩まし気に言う。

《うーむ。魔力を限界以上に使ったせいで老化が進行したという話は聞いたことがあるが、体が幼くなったまま戻らないなんて話は聞いたことがないな。そもそも「時間逆行」もよく知らん。相棒の体は一体どうなっているんだ？》

「そんなのは僕が知りたいよ」

《相棒に起きた変化は小さくなったことと、使える魔力が減ったことだけなのか？ もう

少し手がかりが欲しいぞ》

うーん、手がかりか……。そう言われてもなあ。

僕は懸命に体が小さくなる以前と今を頭の中で比べる。

すると、一つ思い当たる点を見つけた。

「あつ、ダークの声が聞こえなくなったね！」

僕の体には、ダークと呼ばれる、意思ある呪いが宿っている。

以前はそうしようと思えば心の中でダークと話が出来た。

しかし、今はいくら呼び掛けても返事がない。

ダークとは普段ほとんど話さないから、すっかり忘れていたよ。

《呪いと会話出来ない……。か……。意味はありそうだが、それだけではいまいち分からんな……。他は？》

「流石にこれ以上は思いつかないかな」

僕がそう言うと、アトランティカは静かになってしまった。

現状では、答えは出せないということだろう。

僕とアトランティカの間に沈黙が広がる。

うーん、アトランティカでも分からないのか……。

内心参ったと思いながらも、僕は暗い空気を変えるために言う。

「そういえば、皆は今ごろどの辺にいるんだろうね？」

皆は新たな穢れの反応があった、フレアニール大陸に向かっていているはずだ。

皆がここ、クラウディア王国を出てから一週間くらい経っているし、今は大陸間の移動のため船に乗っているかもしれないな。

すると、僕の言葉にアトランティカが反応する。

《念話は送ったのか？》

「送ろうとしたけど、無理だったよ。届けられなかった」

魔力が戻った後、僕はすぐに仲間に魔力による念話を送ろうとした。

しかし、届いた手ごたえがなかった。

今の僕の魔力量では、遠いところまでは念話は送れないということだろう。

《そうか。それでは故郷のカナイ村とも連絡は取れないのだな》

「そうなんだよ。母さんやとー祖母ちゃんと話せれば、体を元に戻す手が見つけられるかもただけどね」

僕の故郷、カナイ村はゴルディシア大陸の北部にある。

カナイ村の周囲には強力な魔物がうじゃうじゃいるせいで、村に暮らす人々は普通の人と比べればかなり強い。

中でも僕の家族は「黄昏の夜明け」という伝説的冒険者パーティの元メンバーで、信じられない強さを誇っているのだ。

だからこそ、元聖女である母さんや魔女である父方の祖母——とー祖母ちゃんの知恵を借りられれば、何かヒントを掴めるかもしれないという訳である。

まあ、念話が届かない以上、それも今は叶わないだけどね。

《魔狼祭はもう終わっているのだろう？ 向こうから連絡はないのか》
「ないよ。連絡の一つくらい欲しいんだけどね」

カナイ村では毎年決まった時期の一週間ほど、土地の魔素が一気に増大して魔物が増殖

する。

その魔物をカナイ村の人々で狩るのが、魔狼祭というイベントだ。

魔狼祭が終わったら家族の誰かが念話をくれるという話になっていたのだが、いまだになんの連絡もない。

家族の皆は結構適当だから、ただ単に忘れているだけだと思うけど、少し心配だ。

《誰とも連絡がつかないとなると、相棒はこれからどうするつもりだ？》

アトランティカに尋ねられ、僕は少し考えてから答える。

「体を元に戻したいんだけど、手がかりがないからね。このまま修業を続ければ戻るとも思えないし……」

今は毎日五千回素振りしているし、魔力が使えるようになってからは、魔力操作の訓練も欠かさず行っている。

だが、力は少し戻っても、体そのものには全く変化がない。

修業を続けるのは前提として、何か別のアプローチが出来ればなあ。

それに正直に言えば、家にこもって修業するだけの暮らしに少し飽きてきた。

せめて冒険者ギルドで依頼でも受けられれば気分転換が出来るんだけど……。

僕が悩んでいると、突如として玄関の方から、コトンという音が聞こえてきた。

玄関にあつたポストに何か物が入られたのだろう。

「郵便だね」

そう呟くと、意識を切り替える意味も込めて、玄関へと向かった。

ポストを開けると、そこには派手な装飾が施された封筒が入っていた。

僕はそれを掴みりビングに戻ると、改めて封筒を見つめる。

……シフォンティーヌ公爵家の紋章と、ファルシユラム公爵家の紋章がついているな。どちらもクラウディア王国の有力貴族家だ。

そんな家が、僕になんの用だろう。

あつ、もしかしてシンシアとクララからかな。

シフォンティーヌ家の令嬢であるシンシア、ファルシユラム家の令嬢であるクララとは、僕が魔法学園に潜入した時に知り合い、今でも交流は続いている。

二人とも、僕に何か用があるのだろうか。

でも少し前に今の姿で二人に会ったら、思い切り子供扱いされたんだよなあ。

恥ずかしいし、今はあんまり会いたくないんだけど……。

僕は気が重くなりながらも、封筒を開ける。

「……あれ、これ、シンシアとクララからじゃないな……」

中に入っていたのは、シフォンティーヌ公爵とファルシユラム公爵の名前が書かれた招待状と手紙だった。

僕は不思議に思いながら、手紙を開いた。

そして、文面に視線を落とす。

……おいおい、近々シフォンティーヌ家で行われるパーティーに僕を招待するだって!? なんてそんなことになったのか知るために、僕は手紙を読み進める。

すると、シンシアとクララの父親達が僕に直接会ってみたいという旨が書かれていた。

「マジかあり! この姿で行くのはなあ……」

思わず一人ごちる。

招待状には子供の姿でも構わないと書いてあつたので、シンシア達から僕の事情は聞いているのだろう。

でも、多くの人が参加するパーティーに、今の姿で参加するのはかなり恥ずかしい。

それにパーティー用の服なんかも持っていない。

とはいえ招待主が公爵となると、断るのもマズそうである。

僕は手紙とにらめっこしながら、しばらく一人で悩み続けた。

招待状を受け取ってしばらくしてから、僕はシフォンティーヌ家の御者さんが操る馬車の客席にいた。

あれから改めて考えたのだが、パーティーには参加することにした。

恥ずかしいという理由だけで公爵家の頼み（たの）みを断るのは、流石（さすが）に失礼すぎるからね。僕は緊張しながら、改めて周囲（まわ）を眺める。

流石公爵家の馬車ということだろう。客用の座席が個室になっている。

いわゆる箱馬車だ。

装飾も非常に豪華（ごうか）であり、大きな窓からは周囲の景色も見える。

うーん、こんな馬車に乗るなんて、なんだか落ち着かないなあ。

僕は田舎（いなか）のカナイ村育ちだ。

だから、貴族のパーティーになんて参加したことがない。

礼儀（れいぎ）とかもよく知らないけど、本当に大丈夫だろうか。

まあ手紙で何度かやり取りし、マナーとかはそこまで気にしないでもいいし、服装もいつも通りでいいと聞いているけど……それでも不安は不安だ。

僕が落ち着かないでそわそわしていると、窓から外を見ていたシドラが言う。

「あるじくたくさんの馬車が屋敷に向かっているヨ」

シドラはいつも通り、のんきな様子だった。

そんなシドラを見て、僕も少しリラックス出来た。

僕もシドラに合わせて窓の外を見る。

「あ、本当だ。それに、ここからでも屋敷が見えるね」

まだ少し距離（きょり）はあるが、それでもシフォンティーヌ家の屋敷が見えている。

「あの、執事（しやくし）さん、この馬車達には今日のパーティーに招（まね）かれた人が乗っているんですか？」

僕の問いに、護衛係として客室に同乗していた執事さんが答える。

「それだけではないと思います。今日は屋敷の別ホールで、貴族の交流会も行われる予定なんです。そちらに参加する人も多いと思いますよ」

なるほど、どうりで多くの馬車を通っている訳だ。

公爵ともなれば、毎日のように他の貴族と交流しているのだろう。

想像もつかない世界である。

僕は興味深いと思しながら、シドラと窓の奥を眺め続けるのだった。

十分ほど馬車に揺られ、僕らはシフォンティーヌ家の敷地内に入っていた。
流石は有力貴族というべきか、屋敷の庭が広すぎて、もう敷地を囲う外壁が見えなくなっていました。

しかも、屋敷そのものも本当に大きく、立派だ。
横幅が大きすぎて、視界に入りきらないほどである。

僕がそんな光景に感動していると、僕の乗っている馬車が、他の馬車とは異なる方向へ向かっていった。

馬車は屋敷の正面ではなく、裏口の方へ進んでいく。

そして、地下に繋がる入り口を通り、通路を進んで行くと、馬車が停まった。
執事さんがドアを開けてくれたので、外に降りる。

周囲は開けた空間となっているが、ここは馬車の待機場所だろうか。

「ここに馬車を停めるんですか？」

僕がそう言うと、次いで降りてきた執事さんが答える。

「いえ、実はこの近くに来賓室へと直通している隠し通路があるのです。リユカ様にはそこを通っていたかどうかと思ひまして」

「表を通ってはいけない理由は何かあるのですか？」



「リユカ様はあまり目立ちたくないと伺いましたので。それにそちらの飛竜も人目を引くでしょうし」

今の姿を見られるのが恥ずかしいという話は、事前に手紙で公爵家に伝えていた。だからこのような対応をしてくれたのか。

「気を遣っていたいた訳ですね。ありがとうございます」

僕はお礼を言くと、執事さんはニッコリと笑い、近くの壁に手を当てた。すると、壁の一部が突然スライドし、通路が出現する。

「どうぞ、こちらです」

おお、こんな仕掛けがあるのか。

僕は驚きながら、前を歩く執事さんについていった。

薄暗い道を五分ほど歩き、再び執事さんが近くの壁に手を当てると、また壁の一部がスライドした。

その通路の奥には、豪華な装飾で彩られた部屋が広がっている。

ここが来賓室なのだろう。

執事さんの後に続いて部屋に入る。

「パーティの開始まではこちらでお待ちください。後ほど公爵様もいらつしやると思い

ます」

「分かりました」

僕がそう言うと、執事の人は隠し通路への入口を元に戻し、部屋を出て行った。

僕は改めて周囲を見回す。

部屋の中央には大きな四角形の机が置かれており、それを囲むようにソファが四つ配置されていた。

机の上に置かれた皿には、色鮮やかなフルーツが盛り込まれている。

うーん、やっぱり凄い部屋だなあ。

実家で暮らす二人のぼーちゃんの部屋もレアな魔道具が置かれていて豪華だけど、ここまで品がある訳ではない。

まあ、ただの平民の家と、公爵様の屋敷を比べてもしょうがないけどね。

僕は少し羨ましく思いながら、ソファに座るのだった。

十分後、僕はメイドさんが持ってきてくれた紅茶を飲みながら一息ついてた。

シドラはテーブルの中央にあるフルーツを美味しそうに食べている。

メイドさんには食べてもいいと言われたけど、こんなところでも食欲が衰えないなんて、

流石シドラだなあ。

そんなことを考えていると、部屋の扉がノックされた。

僕が立ち上がり返事をする、扉が開く。

そこには豪華な衣服を身に纏った中年の男性が二人立っていた。

彼らがきつと公爵だろう。

二人が部屋に入ってきたので、僕は頭を下げる。

「初めまして、リユカ・ハースフェイと申します」

「初めまして。君のことは娘のシンシアから聞いているよ」

「私の娘のクララからもな」

二人はそう言くと、笑みを浮かべてからソファに座った。

「おい、シドラ。そろそろ——」

失礼だと思い僕がシドラに声を掛けるが、シフォンティーヌ公爵は大きな声で笑う。

「ははっ。私達が君を招いたのだ。気楽にしてくれ」

ファルシユラム公爵もその言葉に頷き、僕をソファに座るよう促してきた。

二人が優しそうなことに安堵しつつ、僕はソファに腰掛ける。

そして改めて二人を見つめた。

両公爵とも、僕の父さんと同じ年くらいだろう。

シフォンティーヌ公爵はシンシアと同じように肌が浅黒く、ファルシユラム公爵はクララと同じ青っぽい髪色をしている。

見分けが付きやすくてよかったと思うと、シンシアの父のシフォンティーヌ公爵が口を開く。

「今日は来てくれてありがとう。娘は用事があって少し席を外しているが、すぐに来ると思う」

「いえいえ、気になさらないでください」

僕がそう言って頭を下げると、ファルシユラム公爵が感慨深そうに言う。

「それにしても君があの子のシンシアの子供か」

「父さんのことをご存知なのですか？」

突然父さんの名前が出てきて、僕は思わず尋ねた。

シフォンティーヌ公爵が頷く。

「私達二人と君の父上のジーニアスは、学生時代を魔都ウインデルと一緒に過ごした仲間だよ。昔の学友という訳だ」

「学生の頃からジーニアスは頭一つどころか二つ三つも抜きん出た存在でな。試験の時

はよく世話になったものだ」

父さんは錬金術師で、今は村で研究ばかりしている。

父さんの学生時代の話はあまり聞いたことがなかったけど、シフォンティヌ公爵やファルシユラム公爵と知り合いだったなんて、驚きだ。

「そういう訳もあって、今日は君と直接話したかったんだ」

「まさか、小さくなっているとは思わなかったけどね」

そう言っつて、シフォンティヌ公爵とファルシユラム公爵達は愉快そうに笑った。

イメージしていたよりもずっと気のいい人達だと、僕は思ったのだった。

それからしばらく、僕らは父さんの話題を中心に盛り上がった。

公爵達二人も、随分と砕けた口調になっている。

「いやー、それにしてもまさか女に縁のなかったジーニアスが聖女様を搔っ攫うとは思わなかったなー」

シフォンティヌ公爵がそう言っつと、クララの父親が懐かしむように応える。

「そうだな。あれは世界を揺るがすニュースになったくらいだからな」

「え？ そうだったんですか!」

そんな話、聞いたことがない。

僕が思わず聞き返すと、シフォンティヌ公爵は楽しそうに笑った。

「考えてみなさい。神の教えを否定する錬金術師と、神殿の聖女様の結婚だよ。決して交わることがない水と油が交わったようなものだ」

確かに、理屈を重視し神の存在を信じない錬金術師は、聖女を始めとした、神を信じる人々に嫌われていると聞いたことはある。

でも父さんと母さんはそんな事情を感じさせることはなく、いつも普通に仲良しだ。

そんな二人の結婚が、まさか世界を揺るがすニュースになっていたなんて……。

父さんの話をもう少し聞こうとした瞬間、突然尿意を覚える。

うーん、体が小さくなつてから、トイレが近くなつた気がするな。

「お話の所すみません、お手洗に行きたいのですが……」

僕がそう言っつと、シフォンティヌ公爵が答えてくれる。

「この部屋を出て三つ目の通路を右に曲がり、その後、左から二番目の扉を開けるとお手洗いだ。少し複雑だが、案内が必要かね」

迷惑を掛ける訳にはいかないと思い、僕は首を横に振った。

そして、頭を下げて一人で部屋を出る。

するとフルーツを食べ終えたシドラがついてきた。

僕はトイレに向けて歩き出す。

えっと……確か三つ目の通路を右に……その後、左から二番目だっけ。

流石貴族の屋敷というべきか、思った以上に通路が広く、扉の数も多い。

先ほど言われたことを思い出しながら五分ほど歩き、何とかトイレを見つけた。

無事用を足して、トイレを出る。

そして改めて周囲を見回した。

「あれ……どっちに行けばいいんだっけ？」

周囲をキョロキョロと見るが、帰り道がいまいち分からない。

うーん、行きと帰りは左右が逆になるはずだけど……。

子供の背丈だと見える景色にもちよつと違和感があるから、余計に分からなくなるな。

来た道を思い出しながらゆっくり歩いていくが、周囲にある扉のデザインがどれも同じ

で、いまいち進んだ感覚がない。

すると、シドラが口を開く。

「あるじ、こっちから食べ物匂いがするヨ！」

そう言って、シドラは一つの扉の方へ飛んで行った。

もしかしたら、さっき食べていたフルーツの匂いをかぎつけてくれたのかな。

僕はそう思い、その扉を開ける。

しかし目の前に現れたのは大きなホールだった。

そこでは豪華な服を着た貴族と思しき人々が会話をしている。

部屋にいる人々の視線が一気に僕に集まる。

マズい！ 部屋を間違えたぞ！

今日は貴族の交流会もしていると聞いたし、ここはその会場に違いない！

僕が謝罪の言葉を口にするより先に、ホールにいた騎士が近づいてきた。

「お前は誰だ！ ここに何の用だ！」

「あの、シフォンティース公爵様やファルシラム公爵様と来賓室で面会をしていたのですが、トイレに行っている間に帰り道が分からなくなってしまうって……」

僕は正直に言うが、騎士は怒鳴り声を上げる。

「そんなみすばらしい恰好をして！ 見え透いた嘘を吐くな！」

いつも通りの服装で問題ないと言われたのだが、もしかしてこの騎士は僕のことを聞いていないのだろうか。

確かに事情を知らない人からすれば、今の僕は貴族、ましてや公爵と関わりがある人間

には見えないだろう。

どう説明しようかと悩んでいると、ホールの奥から子供の声が聞こえる。

「パーティー会場の中に平民が紛れ込んでるぞー、追い返せー」

その言葉が聞こえた直後、貴族の子供達が複数人、笑みを浮かべながらこちらに向かって走ってきた。

どうしよう。彼らに捕まると余計騒ぎになるよな。

……よし、ここは逃げよう。

僕が走り出すと、すぐに子供達は見えなくなる。

いくら体が小さくなったといっても、ただの子供に捕まる訳はない。

そのまま二、三分ほど後ろを気にしつつ走っていると、気付けばテラスへと繋がる大きな廊下に出ていた。

僕は周囲を見回して呟く。

「とりあえず距離は取れたけど、帰り道が本当に分からなくなっちゃったな」

窓の先には立派なテラスと、その奥に整備された庭が広がっている。

こんな場所は見覚えがない。

どうしよう。どうやって来賓室に戻ろうか。

僕が頭を悩ませていると、廊下の奥の曲がり角から子供達の叫び声が聞こえてきた。

げっ、もう来たのか!?

周囲を見回し、隠れる場所を探すが見当たらない。

すると廊下の奥から子供達が現れ、そのうちの一人が『あいつを捕まえろー』と言って僕を指さす。

これはまた逃げるしかないか。

しかし走り出す直前、元の僕と同じくらいの背丈の青年が、後方から現れた。

「待ちたまえ君達! なぜこの子を捕まえようとする!? いじめは良くないぞ!」

青年は僕の前に立つと、子供達に向けて声を発した。

身長差があるせいで顔はうまく見えなかったが、この声……どこかで聞いたことがある気が……。

僕が記憶を辿っていると、子供の一人が口を開く。

「そいつがこの場に相応しくない平民だからだよー!」

「……なるほど。だが、この子はどこかの家に仕える従者かも知れないぞ。それならここにいる資格はあるはずだ」

「それを聞くためにも、まずは捕まえないといけないじゃん!」

子供のバカにしたような言葉に、青年は落ち着いた声で答える。

「だが、この子が君達よりも上位貴族の従者だった場合はどうする？ その場合、君達は

無礼を働いたことになる。お叱りを受けるのは君達のご両親だぞ」

親に迷惑を掛けると言われ、子供達が一気に難しい表情を浮かべる。

「ほら、この子は私が騎士の元へ連れて行くから、君達は両親の元へ戻りなさい」

青年にそう言われ、子供達はつまらなさそうにしつつも、その場から去っていった。

ふう、この人が誰か知らないが……凄く助かった。

お礼を言おうとした所で、僕を庇った青年はこちらに振り返った。

彼の顔を見て、僕は思わず叫ぶ。

「あ、ナガネギ！」

そこにいたのは、かつて魔法学園で知り合った青年、ナガネギこと、ナガネだった。

「ナガネだ！ ん？ 君は私のことを知っているのか？」

ナガネはツツコミをした後、不思議そうに首を傾げた。

そうか、今の姿を見ても僕のこととは分からないのか。

よし、からかう意味も込めて、ヒントを出してやろう。

「野菜で財を成したデイクソン伯爵家の長男であり、そして魔法学園では女の子の前で格

好付けようとして僕に振り返りにされ、さらに傲慢だった魔剣グリルリーキを折られたナガネだろう。知っているよ」

「……君はうちの学園の生徒の弟さんか何かか？」

おいおい、ここまで言っても分からないのか。

僕は仕方ないと思い、腰に差した魔剣アトランティカの刀身を軽く見せた。

するとナガネは思い出したかのように叫ぶ。

「あつ、君はもしかして——!?」

「シー！ これ以上騒ぎを起こしたくないし、事情を説明するから周りに人がいない場所に案内してくれないか？」

ナガネは頷くと、近くの個室に案内してくれた。

どうやらここはナガネのために用意された部屋らしい。

僕はそこで、自分がリユカ・ハーサウェイであること、魔物と戦い子供の姿になったことを改めて説明した。

僕の説明を聞いたナガネは、驚きながら口を開く

「まさかそんなことになっていたとはな。魔剣アトランティカを見るまでは誰だか分からなかったよ。最初は誰かの弟さんかと思ったくらいだ」

「元の姿に戻りたいんだけど、戻る手立てがなくてね」

「なるほど……おっと、そうだ。今度会ったらこれを伝えようと思っていたんだ。新聞で見たぞ。第四の魔王を討伐したんだってな。おめでとう！ さすが親友！」

確かに僕は少し前、この世界にいる七人の魔王の一人を倒した。

でも、僕はナガネと親友になった覚えはないぞ。

せいぜい少し仲良くなったくらいだ。

まあ、助けてもらった恩もあるし……好きに呼ばせてやるか。

僕がお礼を言うと、ナガネは笑顔で頷いた。

その後、ナガネは再度口を開く。

「それで、小さくなった事情は分かったが、そもそも親友はなんでこんな所にいるんだ？」

「シフォンティーヌ公爵とファルシユラム公爵に呼ばれて、来賓室で話をしていたんだ。

でもその最中にトイレに行ったら帰り道が分からなくなってるね」

「なるほど、まあこの屋敷は大きいからな。慣れていないと迷ってしまうのも分かるぞ」

「そうなんだよ。それで来賓室を探していたら、間違えて貴族達のパーティー会場の扉を開けちゃってさ。それでさっきの子供達に追われていたんだ」

「そうか。まあ今の親友の姿だと紛れ込んだ平民と思われても不思議じゃないしな……っ

て、来賓室で話をしていたと言っていたな。席を外してからどれくらい経った？」

「正確な時間は分からないけど、三十分くらい経ってると思う」

「だとすると来賓室では今頃騒ぎになっているんじゃないか？ トイレに行ったきり戻っていないということだろう？」

その可能性は十分あるだろう。

ただ帰りたくても道が分からないんだよね。

それに、こんなトラブルを起こしてしまって大丈夫だろうか。

僕が不安そうにしていると、ナガネが自身の胸を叩く。

「道は私が知っているから案内しよう。それに事情の説明も手伝うさ」

「それはありがたいけど、君の家は伯爵家だろう。より目上である公爵家の人間と話すなんて、無礼になるとかはないの？」

貴族の事情はよく知らないけど、気軽に爵位が上の相手に話し掛けるなんて出来るのだろうか。

しかし、ナガネは自信を持って言う。

「我がディクソン家はシフォンティーヌ家やファルシユラム家にも野菜を多く供給しているからな。爵位は異なるが、関係は良好だ。その辺りも心配ない」

そう言って笑うナガネに、僕は頭を下げる。

「どうしようか困っていたんだけど、助かるよ!」

「気にするな、親友だろ!」

「ありがとう……ナガネギ!」

「だからナガネだっつーの!」

ナガネは叫んだ。

その反応を見て、僕は思わず笑ってしまったのだった。

ナガネに案内されて、無事来賓室に帰ることが出来た。

どうやら公爵の二人は、中々戻ってこない僕を心配していたようだった。

そして先ほど言っていた通り、客室にはシンシアとクララもやって来ていた。

僕はナガネに手伝ってもらいながら、皆に事情を説明した。

「——という訳で、道に迷っていたところをナガネに助けてもらったんです」

「なるほど、流石はデイクソン伯爵家の嫡子だ」

「前々から見どころのある青年だと思っていたが、実に頼りになるな」

ファルシラム公爵とシフォンティーヌ公爵は、感心したように言った。

自分の評判が上がっているのを聞いて、ナガネも嬉しそうにしている。
すると、今度はシンシアが口を開く。

「でも良かった。リユカ君もいなくなっちゃったらどうしようと思ったの」

「も? 他にいなくなった人がいるの?」

僕が尋ねると、今度はクララが答える。

「実は少し前から、魔法学園のピエール学園長と連絡が取れなくなっちゃってね。学園にも家にもいないみたいなの」

ピエール学園長は少し前、魔獣祭の手伝いをするためカナイ村に行っていたはずだ。
でも魔獣祭はもう終わっているはずで……どういことだろう。

あつ、そういえば、家族とも連絡が取れなくなっているんだった。

カナイ村に何かあったのだろうか。

いやでも、まだ偶然かもしれないし、何か確認する方法は……そうだ!

「あの、クラウディア王国の軍部にアレクセイという者がいるんですけど、所在を確認する方法はありますか?」

僕が尋ねると、シフォンティーヌ公爵が答える。

「軍部に知り合いはいるし、通信の魔道具を使えばすぐにでも確認は取れると思うが、そ

の人に聞けば何か分かるのかい?」

「『ピエール学園長は少し前、僕の故郷であるカナイ村に来ていました。そしてアレクセイさんも同じ時期にカナイ村に来ていたはずなので、何か事情を知っているかとも思っています』」

「分かった、大至急確認しよう」

ファルシラム公爵は執事を呼び、軍部に連絡するように伝える。

数分してすぐに執事が戻って来て、結果を伝えてくれる。

アレクセイさんはカナイ村から戻っておらず、連絡が取れなかったらしい。

「アレクセイさんも帰ってないか……カナイ村で何が起きているんだ?」

僕は思わず呟いた。

カナイ村に向かった人の消息がこれほど不明になると、何かしらトラブルが起きたのは間違いないだろう。

あそこは僕の故郷だし、知り合いも多い。心配だ。

でも、今の僕は転移魔法が使えないし、すぐにこの国から出ることは出来ない。

それならどうするか。

僕は少し考え、呟く。

「……馬車と船で行くしかない……か……」

すると、シンシアが反応する。

「リユカ君、もしかしてカナイ村に行くつもりなの?」

「うん。家族の皆が心配だからね。それに母さん達に出会えば、体を元に戻す手が見つけられるかも知れないし」

僕がそう言うと、クララが意気揚々と答える。

「なら、私もリユカ君に同行します!」

さらにシンシアも続いた。

「私も! 今の私達のレベルなら、ついていっても問題ないと思うし!」

まさかそんなことを言ってもらえるとは思わなかった。

その気持ちはありがたい。

だが、二人がついてくるのは問題あるだろう。

確かにシンシアとクララならレベル的には心配はない。

しかし、娘が何かしらのトラブルが起きている現場に行くことを、公爵方が許してくれるのだろうか。

僕がそう思っていると、シフォンティーヌ公爵が口を開く。

「駄目だ！ と言いたい所だが、リュカ君には世話になったのだろう。恩返しの意味も込めて、行ってきなさい」

ファルシラム公爵も頷いていた。同意しているのだろう。二人の様子を見て、シンシアとクララは笑みを浮かべた。

「お父様！ ありがとうございます！」

しかし、シフォンティヌ公爵は厳しい口調で続けた。

「とはいえパーティーのメンバー構成を考えると、もう一人くらい誰かに同行してもらいたいのだが……」

確かに、子供と女の子二人のパーティーとなると、変な奴らに絡まれる可能性も高そうだ。とはいえこのような時に頼れる知り合いは思いつかない。

僕は少し考えて呟く。

「外部の冒険者に頼む……いや、身元がよく分からない人も危険だな」

そう言って悩んでいると、後ろから肩を叩かれた。

振り返ると、先ほどまで黙っていたナガネが笑みを浮かべていた。

「俺が同行しよう」

ナガネはそう言うが、僕は素直に頷けない。

彼とは以前戦ったことがあるが、その実力は低いと言わざるを得なかったからだ。しかし、僕の心配を見透かしたようにナガネは続ける。

「レベルは心配ない。以前親友に魔剣を折られてから、死ぬ気で鍛えたからな！ 今の俺のレベルは70を超えている」

レベル70と言えば、カナイ村で修業をしていた時のシンシアとクララと同じくらいだ。

つまりナガネも、一般的な魔物には到底負けない程度の実力はあるということだ。

ただ腕っぷしの面では問題なさそうだけど、ナガネだって貴族だ。

危険な場所についてきてもらって良いのだろうか。

僕は不安になり、ナガネに『本当にいいのか』と尋ねるが、ナガネは『親友だろ！』と言って、笑みを浮かべてくれた。

その後、改めて今後の話をし、物資の支援をシフォンティヌ家とファルシラム家から約束された。

そして、クラウドディア王国を出発するのは、皆が準備を終えた三日後ということになったのだった。